

[1] 久石譲:Stand Alone - NHK スペシャルドラマ「坂の上の雲」メインテーマ

司馬遼太郎が日露戦争を核に明治の青春群像を描いた長編小説を原作とし、2009～2011年の各年末に全13話を3部に分けて放送するNHKスペシャル・ドラマ「坂の上の雲」。森さんはそのメイン・テーマである「Stand Alone」の第2部用の歌手に起用され大きな話題を呼んだ。明日に向かって“凜として立つ”明治の日本人の美しい姿をイメージして作られたというこの曲、作曲は宮崎駿の長編アニメ映画の音楽であまりにも有名な久石譲(1950-)、作詞を手がけたのは、近年は映画「おくりびと」の脚本など執筆活動でも活躍が目覚ましい小山薫堂だ。

[2] 服部隆之:アヴェ・マリア

国民的作曲家・服部良一を祖父に、服部克久を父に持ち、TVドラマや映画のサントラ、ゲームやCM音楽の作曲から、幅広いジャンルの編曲を手がける服部隆之(1965-)の書き下ろしによる「アヴェ・マリア」。**【典礼文】**をテキストとしながらも、昔話で聞いた日本の田舎の風景が浮かんでくるような不思議な雰囲気を感じさせている。壮大なオーケストラによる伴奏だが、まるで幼い頃に母親の背中で聴いた子守歌のような優しさを感じさせる。

[3] フォーレ:ピエ・イエス～《レクイエム》より

古今東西のレクイエムの中でも、フォーレのそれは最も深い優しさと自愛に満ちている。グレゴリオ聖歌以来のカトリック教会音楽の伝統とフォーレ独自の抒情性が融合し、高雅にして慈味にあふれる傑作が生まれた。敬虔なカトリック信者でもあったフォーレがこの曲を作曲するに当たっては、1885年7月25日の父の死、あるいは1887年12月31日の母の死が関係しているという説もある。1888年1月16日に、フォーレが合唱長を務めるパリのマドレーヌ教会で、フォーレ自身の指揮によって5曲からなる第1稿が初演された。1893年1月21日には7曲からなる第2稿が初演され、1901年にオーケストラ・パートを拡充した楽譜が出版された。フォーレ自身は小規模な編成による1893年版に愛着を持っていたとも伝えられる。この録音では、その1893年版が用いられている。第4曲の当たる「ピエ・イエズ」は、イエスに死者の安息を願う1曲だが、単純・素朴な楽曲に、深い優しさと敬虔で真摯な祈りが込められている。(国土)

[4] ペルゴレージ:サルヴェ・レジーナ

バロック後期の作曲家ジョヴァンニ・バッティスタ・ペルゴレージ(1710-1736)は列強国の王位継承争いの舞台となったナポリ王国で激動の時代を生き、わずか26歳という若さで亡くなった。彼が残したとされる(真の)作品はそれほど多くないが、最晩年に書かれたこちらは宗教曲の傑作として知られている。「サルヴェ・レジーナ」とは中世以来、聖務日課で歌われる4大聖母賛歌のひとつ。本来はソプラノの独唱と弦楽合奏および通奏低音のために書かれ5つの部分で構成されており、これはその第1曲にあたる。(東端)

[5] ヘンデル:オンブラ・マイ・フ～《セルセ》より

ヘンデルは、18世紀前半のロンドンでの熱狂的なイタリア・オペラのブームにのって、約40曲にもものぼるオペラを作曲した。今日、〈ヘンデルのラルゴ〉としてあまりにも名高いこのアリアは(〈オンブラ・マイ・フ〉のタイトルの方がポピュラーだろうか)、オペラ《セルセ(クセルクセス)》の中の一曲。ペルシャ王クセルクセスがプラタナスの美しさをたたえて歌う曲で、イタリア古典歌曲の一曲として広く歌われる一方、様々な楽器にも編曲されて親しまれている。(柿沼唯)

[6] ヘンデル:涙の流れるままに～《リナルド》より

この曲もまた、イタリア古典歌曲の名曲として広く知られている。ヘンデルのオペラ作曲家としてのロンドン・デビュー作《リナルド》の中の一曲で、十字軍の英雄リナルドの許嫁アルミーナが、囚われのわが身を嘆く美しいアリアである。(柿沼唯)

[7] モーツァルト:アヴェ・ヴェルム・コルプス

幼い頃から類い稀なる天才振りを発揮し若干 35 歳で天に召されたヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)の、これは最後の年の夏に書かれたモテット(複数の声部からなるミサ曲以外の宗教曲)。妻コンスタンツェが療養中に世話になったバーデン在住の人物に感謝の気持ちを込めて献曲されている。テキストは 14 世紀の法王インノケンティウス 4 世の作とも伝えられている聖体賛歌。「天上の調べ」という言葉がぴったりの深くて優しい旋律は森さんのソプラノ・ソロで聴くとまた格別の輝きをみせる。(東端)

[8] バッハ:あなたがそばにいたら~《アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽帖》より

この曲は、バッハが 2 度目の妻アンナ・マグダレーナに贈った 2 冊の音楽帖(《アンナ・マグダレーナ・バッハのための音楽帖》)の第 2 巻に収められている 11 曲のアリアと歌曲(そのすべてがバッハの作ではない)の中の一曲で、「あなたがそばにいらしたら、歓喜のうちに私は死を迎え、永久の憩いへと赴きましょう」の歌詞とその澄み切ったただずまいが心を打つ、知られざる名歌である。バッハの作と伝えられるが、原曲は G.H.シュテルツェル作曲とされている。(柿沼)

[9] バッハ:愛ゆえに主は死にたもう~《マタイ受難曲》より

新約聖書の『マタイ福音書』中のイエス・キリスト受難の物語による音楽作品(受難曲)は数多くあるが、質と規模のいずれにおいてもバッハの作品は傑出している。『マタイ福音書』の第 26、27 章を台本の基礎としたこの傑作は、バッハがライプツィヒのトーマス教会のカントルを務めていた 1727 年に初演された。その後長く忘れられていたが、1829 年にメンデルスゾーンがベルリンで復活演奏を行って以来、バッハの、そしてプロテスタント教会音楽の最高傑作の一つとして広く敬愛されている。このソプラノ・ソロは、第 2 部の「ピラトの前のイエス」のシーンで歌われる。イエスの功績を語り、その自己犠牲を歌う。(国土)

[10] バッハ/グノー:アヴェ・マリア

フランス・ロマン派のオペラ作曲家シャルル・グノー(1818-1893)作だが、本来はピアノ伴奏パートに“鍵盤楽器の旧約聖書”と称えられる J.S.バッハ(1685-1750)の《平均律クラヴィーア曲集》第 1 巻の前奏曲を用いたヴァイオリン(またはチェロ)のための作品として書かれたもの。後に【典礼文】が付けられ、今日では様々な楽器のために編曲されて親しまれている。森さんのデビュー・アルバム『あなたがそばにいたら』にもピアノ・ソロによる伴奏で収録されていたが、ここでは荘厳なオーケストラの演奏をバックに。(東端)

[11] カッチーニ:アヴェ・マリア

哀愁たっぷりの旋律にのせて、ただ“アヴェ・マリア”という言葉だけを繰り返す情熱的に歌い上げるこの作品は、20 世紀末の音楽シーンに突然登場しジャンルを超えて広くカバーされる程ポピュラーになった。当初は、現存する最古のオペラ《エウリディーチェ》の作曲家としても名を連ねるフィレンツェのジュリオ・カッチーニ(1545 頃-1618)の作とされていたが、現代の作曲家による模作という説もあり、その正体ははっきりしない。(東端)

[12] マスカーニ:アヴェ・マリア

身近な人間模様を素材とする悲劇的でエモーショナルな“ヴェリズモ・オペラ”の傑作《カヴァレリア・ルスティカーナ》が有名なピエトロ・マスカーニ(1863-1945)。同オペラの間奏曲は単独での演奏機会も多い人気曲で、「アヴェ・マリア」と題して歌詞を付けて歌われるのも定番。ラテン語の【典礼文】も感動的だが、このピエロ・マッツォーニ作詞のイタリア語版の方が、婚約者に裏切られたヒロイン、サントウツァが苦しみの中で聖母マリアに救いを求める気持ちがダイレクトに伝わってきて、より激しく心を揺さぶられるはずだ。(東端)

[13] シューベルト:アヴェ・マリア

短い生涯の間に 600 曲以上のドイツ・リートを残した“歌曲の王”フランツ・シューベルト(1797-1828)の作で、バッハ／グノー作品と並んで広く知られている。【典礼文】で歌われることもあるが、正式には英国の詩人ウォルター・スコットの叙事詩『湖上の美人』のドイツ語訳に作曲された作品の一部で、「エレンの歌Ⅲ」と呼ばれるもの。描かれているのは、乙女エレンが湖畔の岩の上に立つマリア像の前に跪いて父親の罪が許されることを祈る場面だ。(東端)

[14] フランク:天使の糧

ベルギーに生まれたフランクは、パリ音楽院に学び、オルガニストとして活躍した。作曲家として認められたのは 50 歳を過ぎてからだだが、68 年の生涯の終盤に作曲された、交響曲ニ短調をはじめとするオーケストラ作品や、ピアノ五重奏曲やヴァイオリン・ソナタに代表される室内楽曲の傑作には、創作への情熱が満ち溢れている。それらの分野に比べると声楽作品は多いとは言えず、その中では 1872 年に作曲された 3 声部による荘厳ミサ曲イ長調 作品 12 が最も大きな作品であろう。このミサ曲全曲が演奏される機会は多くないが、聖体拝領の部で歌われる「天使の糧」というテノール独唱の 1 曲のみは広く愛されている。(国土)